

# 記念講演

「ともに学び合う道徳科を要とした道徳教育の推進・充実  
～地域に生きる学校づくりを基盤に～」

香川大学大学院 教育学研究科 高度教職実践専攻 教授 植田 和也 様

前に四枚写真を写しておりますが、香川県、日本で一番狭い県です。この中のいくつかわかりますでしょうか。「栗林公園」、「直島」、「三豊市の父母ヶ浜」、そして今ちょうど「瀬戸内国際芸術祭」が行われております。

何が言いたいかというと、時代がどんなに変わっていても、ふるさとの海や山などの自然は変わらない。今日も1年生の教材に自然の尊さ、しかし、私たちの生活だってもっと便利にしたいよ、とありました。

尾道カルタです。向東の生徒さんが作られたものもあります。この尾道カルタは、尾道市内16校の中学生が生徒会を中心に集まって、私たちの街の宝物を紹介しようということで、2023年度は読み札、そして24年度に絵札を中学校のリーダー研修会で作られました。

それに携わられた長江中学校の前生徒会長さんは新聞の記事に、「同じ市に住んでいても他の地域については知らないことが多く、様々な名所や歴史について調べてみたくなった。カルタを通じて観光客にも尾道の良さを伝えたい。」と。まさに自分たちの住んでいるところに対する誇りだとか、自分たちの地域、ふるさとを大切に思う、愛する心につながっています。

哲学者の和辻哲郎は「風土とは単なる自然環境ではなくて、人間の精神構造の中に刻み込まれている」。まさに少し言い換えれば子ども時代を過ごした地域の風土。この尾道水道を眺めるこの風景、この向島の風景。ここで過ごした地域の方との様々な体験を通して、そういった地域の風土というのは、様々な形や関係で私たち自身のものの

見方や考え方に影響を与え、原風景として、ある意味、人格形成の根幹にもつながっていくんだと。郷土の自然やまさに味、空気、風景、言葉、人。そういった様々な地域の良さ、ふるさとの良さということ、時代がどんなに変わっても、私たちは忘れてはいけないと思っています。

今、次の学習指導要領に向けて少しずつ動き出しました。道徳の中でも現代的な諸課題をどうするのかということは、いろいろ学会等でも話題になっています。ただ、学習指導要領がどうであれ、生徒たちが過ごしている今日、中国地方の、いろんな各県からお集まりの先生方の学校の校区、その地域、素晴らしい良さがそれぞれあると思うんです。向東中学校の瀨原校長先生がホームページに書かれています一文、少し紹介させていただきますが、「組織の一員として自分にできることを進んで行うことができる生徒を育てる。そして学校というのは地域から信頼される学校、そこを目指すんだ。」そうなるように何ができるかということ、これを組織として一つずつ大切にしていこうということです。

レジメの方にも少し書かせていただきました。大切にしたい意識として、(1)ののところの下ですが、「共に育て、共に学び、共に成長する」んだと。地域、生徒、先生、そして保護者も含めて一緒にみんなで成長していく。そういう機能をもった学校というのは、地域に生きる学校。学校だって息をしているんだ。

ちょうど今、秋の季節です。校内、いろいろ秋を

感じるような工夫、手だてがありました。学校って地域に生きているんだ。そして地域と共にあり、地域と共に生きる子供たちを育てようとしている。まさにそれはある側面で見ると、学校が「地域の学校」になっていくという風にも捉えられます。学校というのは、やはり地域社会のシンボルであり、地域の宝です。

あの尾道カルタに中学生が込めたそれぞれの地域の良さ、ぜひそういったことをどんなに時代が変わっても大切にしていきたい。まさに私たち大人も、子供たちと一緒に、地域の方と一緒に情報を共有したり、連携したりしながら、できることから、行動の連携につなげていきたい。

そういったことは、解説の総則編の中にも様々に書かれております。例えば、カリキュラムマネジメントの充実。総則編の付録6のところですが、たくさん例示がある中に、伝統や文化に関する教育、郷土や地域に関する教育に関して、様々な教科で横断的に工夫できますよね。こういったことを現代的な諸課題、カリキュラムマネジメントを考える際にということと例示があります。そういった際に道徳教育の重点目標ということをごぜひ大切にしていきたいと思えます。

今日、先生方、大会冊子をお持ちかと思えますが、45ページをお開けください。各県からご提案をいただいている中に、大変素晴らしい取組がいろいろ紹介されています。ぜひこの各提案、大事に読んでいただきたいなと思っております。ここでは竹原市の中学校の道徳プログラムがありまして、地域社会の一員として自分たちの思いを広めようということで、道徳科、総合的な学習の時間、社会科そして道徳科、総合的な学習の時間という風につながっています。そして、そのプログラム全体を通して目指すところ、生徒の意識の流れが丁寧に書かれています。

すごく重要なことです。このカリキュラムマネジメントを考えていく際に、道徳教育というのはこの重点目標に関わってくるところが多々ありますが、生徒の意識を大事にしていくということはや

はり大事です。生徒の意識のつながり、非常に参考になる点が多々この提案の中にあります。ぜひまた読み直していただけたらと思っています。

そういった中で、先ほどの解説総則編の中にはこのような記述があります。「指導内容の重点化」ということですね。先生方の学校で、今年度道徳教育の重点に置いていることっていかがでしょうか。内容項目を思い浮かべたり、自分の学校は今年度こういうことに力を入れている、4月のスタートで校長先生がお話された教育方針や重点、ぜひそんなことを思い浮かべたりしながら考えていただきたいと思います。

そこにはですね、「地域社会の一員としての自覚を深める」「地域の人々との人間関係、地域についての学習を通して、将来の社会の在り方を共同して探究」様々な体験活動がありますが、そういったことを通して「社会の形成に主体的に参画」。総則の中ですが、こういったことに加えて、(5)の伝統と文化を尊重するとのところでは、「郷土を愛する」「伝統や文化などの良さについての理解」、こういったことがあります。きっと各学校でもそれぞれに取り組まれていることだと思っております。中学校の内容項目の中に、「郷土の伝統と文化の尊重」「郷土を愛する態度」とあります。今日、1年生の授業の中で、子どもたちが自然愛護に関わって、向東の海とか、もし向東の海にゴミがとか、そういったことをイメージしながら考える中には、当然「自分たちの島」、「自分たちの故郷」、そういった意識があります。

この内容項目の中には、郷土とは「自分の生まれ育った土地ないし地理的環境のこと」で、郷土とは「文化的な面」を含んでおり、「自らがその土地で育てられてきたことに伴う精神的なつながりがある場所」を示している。具体的にこういったことで説明がされています。ちょうどそれがレジメの1ページの下の方の端の四角で囲っているところです。強調しているところだけちょっとご覧いただいても結構かと思えます。

「独自の行動様式や文化形式」、そんな文言もあります。レジメをめくっていただいて、2ページの方をご覧ください。2ページのところの頭に「ふる

さととの関係や認識を再考」と書いています。ちょっと考えていただけたらと思います。先生方のご自身の郷土でも結構ですし、今現在勤務している学校の校区でも結構です。または広島県と広く捉えていただいてもいいですが、その故郷の良さとか地域の素晴らしさを思い浮かべてください。

今、私たちが過ごしている生活というのは、どうしても何か効率重視になりがちです。しかし、故郷には数値では示せない良さだっただけで多々あります。

では、もう少し具体的に5つの観点で皆さんが地域の一員として、日々の生活、日々の普通の生活の中で何を大切に意識していますか？ というところで、①から⑤まで書いております。二重丸、これは十分よく意識している。丸、時々意識している。三角、あまり意識していない、ほとんど意識していない。でちょっとチェックしていただけますでしょうか？5つお願いします。

1番目、その地域を好きになるためにも、地域の様々なことを知ろうと努めている。「私は努めている」と思えば二重丸で結構です。2番目、本当の意味で地域を知るためにも、地域の人と話をすることを心がけている。地域の人とのコミュニケーションですね。そういったことを意識しているよ。3つ目、地域の山、川、池、地名などについてある程度よく知っているよ、話すことができるよ。4つ目、校区や地域に、ホッとする、自分がなんだかいいなあと感じるお気に入りの場所がある。最後、子どもの地域への思いや現状を把握しようと試みたり生かしたり、日々自分はアンテナを立てているよ。

いかがでしょう。はい。じゃあ二重丸が付いたところだけで結構ですから、ちょっと挙手していただけますでしょうか。

1番、知ろうと努めている。(挙手)ありがとうございます。2番、地域の人とのコミュニケーション、話し。(挙手)結構いいですね。ありがとうございます。3番、山、川、池、地名など名前を。(挙手)はい、ありがとうございます。4番目、お気に入りの場所がある。(挙手)おお、一番多いですね。ありがとうございます。最後5番。思いや現状把握しよ

う。(挙手) はい、ありがとうございます。

じゃあちょっと、一番多かった、お気に入りの場所。こういうところがおすすめで、こういうところがいいんだよというのを、せっかく今日中国地方、いろんな県からお集まりだと思いますので、お隣の方にちょっとお伝えいただけますでしょうか。30秒ぐらいで簡単に結構ですから。はい、お願いいたします。

あと10秒。短くて申し訳ありません。はい、よろしいでしょうか。ありがとうございます。

私も昨日、岡山県の真庭市の方でも言いました。だいが奥の方へ行くと、もう色づきが少しずつ少しずつ感じられる。それぞれいいところがあります。山口も、実は令和4, 5, 6年の3年間で道徳教育推進教師の方にお会いしたはずです。夏の研修で毎年同じことを。鳥取も色々とお邪魔しました。河北中とか。島根もあります。色んなところにお邪魔しましたが、本当に素晴らしい景色だとか、食べ物が美味しいですし、本当にそれってすごい宝なんだということをぜひ子供たちに、授業でなくても結構ですから、先生の好きなお気に入りの場所とか、色々伝えていただきたいなと思っています。

で、そういったことがですね、「シビックプライド」とこの5年ぐらいよく言われていますが、郷土愛にとどまらず、ある意味、自分たちの地域や故郷をより良くするために自分に何ができるか、自分自身が関わる。そして自分がこの故郷の未来、向島の未来のことを考えてこうしていきたいとか、故郷の維持発展に自分も当事者として関わって、いこう、貢献しよう、できることをやっといこう。まさにそういったことだと思いますが、そのためにも今、総合的な学習の時間の工夫だとか、カリキュラムマネジメントだとか、いろんなことが言われています。ふるさと学習というのもいろんなところでいろいろ工夫して取り組まれています。

郷土への愛着と誇りという視点でよく小中連携で取り組みます。今日のこの提案の中にも小中連携の取組があります。是非ご参考にさせていただけたらと思います。例えば、香川県のある学校、これ

も非常に子どもたちの数が少なく、小中一体型の学校の中で行われていますが、小学校の「ねむの木学習」から中学校の「やまなみ学習」ということで、ふるさとという視点で小中を連携する、そういったカリキュラムを組んでいるような学校も今、人口減に伴いながら少しずつ増えているかと思っております。これは香川県で四国大会をした学校で、その自分たちの地域の残したい風景だとか史跡、それを国語の短歌にする、そして自分たちが写真を撮ってくる。これまた別に絵は絵で描くんですが、美術の時間、様々な時間を活用して、ふるさとの良さを表現していこう、アウトプットしていこうと。では、資料の2のところですが、こういったことを学校教育の全体の道徳教育でいろいろ取り組まれて育んでいるんですが、道徳教育ってそもそも何のために行っているのか。

そもそも道徳教育は何のために行うのか。

そんなに難しく言わなくて、先生方はどのような人間になりたいと普段思っていますか。また、どんな生き方がしたいとか、何を大切に生きていますか。ちょっと自分に問いかけてみてください。答えやすいのどれでもいいですから、自分自身に問いかけてみてください。

今日、2年生の授業の導入のところで、村上先生が、先ほど藤井指導主事様からのお話がありました導入のところで、課題が出てですね、書かなくていいから静かに、とにかくじっくり考える時間をとる。ある意味、静の時間です。自分に向かうということ、内省するということ。とにかくその時間ってすごく大事だと思うんです。道徳の時間に。当然発言して、聞いて、受け止めてということも大事ですが、もう一つ、静かに自分の内に向かう内省の時間。短くて結構です。そういったことが大事です。これを様々な教育活動の中でぜひ問いかけていただきたいと思っています。

道徳教育の使命は、解説等には確かにこう書かれています。「人格の完成」。「国民の育成の基盤」。それが道徳性であり、その道徳性を育てることが学校教育における道徳教育の使命、つまり教育活動全体で取り組む道徳教育の使命です。

それは人格形成の根幹に関わる、人間としての生き方についての考えを深めることにもなっていくんだということです。

令和3年答申には「良さや可能性の認識」そして「多様な人々と協働」し、「様々な困難を乗り越え」、「持続可能な造り手となることができるようにすること」と表現されました。解説の中、答申の中にもありましたし、私もすごく重要だと思っています、この言葉。

道徳としての問題を考え続ける姿勢。1時間今日考えたから終わりではなくて、考え続けていくということです。ある意味、道徳はいかに生きるかを自分に問いかける、考え続ける、そのことが一つ目指す姿だとも言われています。自分には何ができるのかを考えること。

人間の行動には当然さまざまな道徳的価値が関わってきます。吉野さんの『君たちはどう生きるか』の中でも、「人は自分と向き合って生きていかなければいけない」。ある意味、自分を少し客観的な姿として捉えようという、特に中学生ができるようになってくる「自己理解を深める学習」でもあるということです。

もうご承知の通り、道徳教育の意味、教育基本法 第1条「子どもたち一人一人の成長や道徳性の発達」、そして「先生方の授業力向上」、それは学校力向上にもつながること。まさに学び続ける教育。そして、私は「教師としての倫理観やモラルの向上」にもつなげてほしいと思っています。

今日ホチキス止めています資料の11ページをご覧ください。中等教育資料の中に書かせていただいたものですが、11ページの最後の、星印を2つ両サイドにつけているところをご覧ください。いろんな研修会で必ず私は先生方をお願いというか、期待というか、特に推進教師の先生にはぜひこういった視点を持ってほしいということ、3つの視点で言っています。

1つは、「道徳科の授業力向上」に関して。授業を見て分析する力、授業者、参観者を成長させる力。つまり、今日参観された先生方が今日の授業を自分ごととしていかに学ぶか、何が自分に取り

入れられるか、自分ならどうか。そして授業を見せる力量、そういったことを向上させる。

2つ目が「道德教育の充実」に関する視点です。

最後の3つ目ですが、やはり教材研究を通して、また生徒の様々な考えを聞きながらですね、教師自身の「人間としての倫理観」を磨いていただきたいということです。人間としての自分を磨く、人間として生きること、人生の意味を子供と共に模索するということです。そして、家庭や地域社会のモラルの向上、学校のモラルや秩序、校風を通して、常に自分自身を磨こうと意識する。そういったことをぜひ大切にしていきたい、いただきたい。お忙しい中で、ほんのちょっと、時々でも結構です。そんなことを意識していただけたらと思っています。

3ページの方に戻ってください。

9月25日に論点整理が出されたこと、もうご承知の通りかと思います。これからの方向性が、「深い学びの実装」「多様性の包摂」「実現可能性の確保」。その中でも特にいろいろ顕在化している課題、それをどう改善していくかということで、キーになっているのはこの図ですが、今まで言われていた「学びに向かう力、人間性等」の整理イメージ、特に人間性ということで、道德教育も様々なことで関わりますが、真ん中に「学びの主体的な調整」。そして、「学びを方向付ける人間性」「他者との対話や協働」。

まさに向東中学校が大事にしている対話や協働。その中にもいろんな視点があります。「他者からのフィードバック」とか、そして「初発の思考や行動を起こす力、好奇心」。こういったことが教育活動全ての中で基盤となり、これから各教科の改訂作業に向けて部会が運営されてまいります。

そういった中で、やはりですね、道德教育というとき、その要は1時間の授業です。1週間に1時間しかない道德の授業、先生方いかがでしょうか？楽しんでますでしょうか？生徒さんは楽しみにしていますでしょうか？この1時間の授業をいかに大切に積み上げていくか、究極の重要なところもそこだと私は思っています。

そういった中で、是非、道德の授業においても、「主体的・対話的で深い学び」を基本としながら、目標だとか特質をしっかりとご理解いただきながら、内容項目等について正しく理解し、実践し、評価し、少しずつ少しずつの改善でいいですから、それを意識していくことです。そういった中で、この目標に書かれていること、そして中学校の解説の中でこの17ページのところは非常に深い哲学的な意味も含んでいますので、この赤字のところだけ読ませてください。是非また解説17ページご覧いただけたらと思いますが。「人生の意味をどこに求め、いかにによりよく生きるかという人間としての生き方を主体的に模索し始める時期」、つまり中学生。「人間としての生き方についての自覚は、人間とは何かということについての探求とともに深められる」「人間についての深い理解なしに、生き方についての深い自覚が生まれるはずはない」。「人間についての深い理解と、これを鏡として」自分を映すということです。「鏡として、行為の主体としての自己を深く見つめることとの接点に、生き方についての深い自覚が生まれていく。」この中のキーの一つが、「鏡として」ということです。接点・自己を見つめる。授業の中でもあります。今日の姿の中でも、あ、自分を見つめているなという、ほんの短い時間かもわかりませんが、様々な形で取っています。そういったことをぜひ意識していただきたいし、大切にしていきたいと思っています。

今日の資料の13ページご覧ください。「自己を見つめて考える」ということで、下線を引いている左側だけちょっと読ませてください。

これ元教科調査官の中学校の柴原弘志先生がよく言われる言葉ですが、「自己を見つめるとは、柴原の言葉を借りれば『自分が自分に自分を問うということ』」、「自己のものの見方や考え方、生き方を、自分自身に本当にそれで良いのだろうか」と、これまでの経験や価値観を手がかりに再確認し冷静に見つめ直そうとする瞬間」で、右側のところに今読みました解説17ページのことを書いています。半分より下のところで少し下線を引いている

ところ。大切にしたいことは、単に望ましいと思われるきれいごとの発言に終始するのではなく、人間についても、分かっているけれどもそれができないんだよなという深い理解、人間理解ですね。それを大切に、悩みや葛藤も含めて、生徒自身が深く自己を見つめようとする姿勢。多少の沈黙や静を恐れずに共に考えながら待つ姿勢、じっくりと聞く姿勢で共感的に受け止めていきたいということです。

ぜひこの「鏡として」、そして授業の中で時々感じる「接点」ということを、様々な子どもたちの姿で追求していただきたいと思っています。

少し言い方変えますが、考え続けるためにも、例えばです。生徒に投げかけることとして、道德の時間以外でも結構だと思っています。私は朝の会であろうが、学活の最後とか、いろんなところで人と共に生きていく上で、自分は人として何を大切にするか、または自分はどのように生きるべきかという自分自身の、ある意味心の芯、何を一番大事にしているか、道德的価値についての理解を深めたり、考えたりする機会を様々に増やす、大切にすることをしてほしい。これは香川県のある中学校が、「あなたにとって命とは、生きるとは」ということで、一人一人が書いて、それを先生が生徒と一緒にですね、少し仲間分けして、関係をつないでいます。この先生は こういったことを道德の時間以外にもいろいろと、年間通して何回かされます。同じような問いを繰り返し投げかけていきます。

内容項目のところにこう書かれているんですね。「教師と生徒が人間としてのより良い生き方を求め、共に考え、共に語り合い、その実行に努めるための共通の課題である。」

教師が一方向的に教えるんじゃなくて、一緒にむしろ生徒と考え合う、語り合う、そういった意識を大切に、内容項目を深く理解してほしいということです。

で、やはり内容項目を理解するためにも、解説を読み込むということはよく言われますが、例えばですね、小中学校の内容項目、このようにも整理されています。左側右側で向かって左側、内容

項目の概要、ここすごく重要です。そして右側のところも、指導の要点が中学校の段階では、そして具体的な指導に当たってはさらにということです。例えば、今日の授業でもありました、2年生、「自主、自律、自由と責任」。簡単なようでこの内容項目にいろんな価値が含まれています。ちょっとそれを一緒に考えていきたいと思っています。

資料の4ページです。いろんな学校でこういったことを言われます。「先生、内容項目を深く理解するというのは何度も聞くんだけど、例えばどんなことをしたら効果的ですか。そんなに時間をかけなくても、15分でもできることってありますか？」とかよく聞かれます。いろんなやり方はあるんですが、当然読み込むことが一番ですが、例えば、私は先生方に自分事として捉えてもらうために、あえて、内容項目の概要のところをわざと短く切って、例えば、この、今日の2年生の「自主、自律、自由と責任」であれば、10個に分けて、これに自分自身が日頃できているかどうかということをや二重丸、丸、三角、バツつけます。それだけでも内容項目の理解につながります。

ちょっと時間取りますので、2分3分取りますので、①から⑩まで。二重丸、うん、自分はよくできている。丸、まあまあできている。三角、うーん、あまりできていないかな。バツ、全く。ちょっと付けてみて、お隣とご相談してみてください。はい、ちょっと時間取りますのでお願いします。

「自主、自律、自由と責任」。当然、何度も読まれたことあると思いますが、じっくり自分の頭で考えたら、自分ってだめだなと思いますよ。自分はできてるかな？って。なかなかこれ全部に二重丸は難しいですね。大人でも、難しいですね。

つまり、一つの内容項目の中に様々な価値が含まれていると。「価値」と言われ、ちょっといかがでしょうか。二重丸のところだけ、またちょっと教えていただいているんですか？遠慮せずに。先生方すごく遠慮されて、「いやー、自分は」と厳しく評価して二重丸全くつけない先生もおられるから。遠慮せずにつけてください。やはり生徒の前で先生もできていることはできているんだよ、と言うこ

とも大事だと思いますよね、ときに。

はい、1番いかがですか。(挙手)ありがとうございます。10人ぐらいいます。はい、2番。(挙手)あ、あ、増えました。はい、ありがとうございます。3番、「自分の力で決定する」。(挙手) はい、ありがとうございます。4番。あ、4番が「自分の力で決定する」ですね。(挙手)はい、ありがとうございます。5番。これ難しいです。「誠実に実行する」ってね。(挙手)あ、ありがとうございます。6番、「その結果に責任を持つ」。(挙手)ありがとうございます。OK。7番いかがでしょう。(挙手)はい、ちょっと少なくなったかな。8番。(挙手)ありがとうございます。先ほどと少し当然重なるところはあります。文節で分けてあれしていますから。9番、「責任を持つ」ね。(挙手)。最後10番です。(挙手)多数派、付和雷同、ありますよね。ありがとうございます。

例えばですが、こういったことも5分10分あればできます。解説開いてコピーしていただいても結構です。主任、推進教師の先生がちょっとチェックしてみようとか、じゃあ、今日の教材の中にはこの中の特にどういったところが主人公のあれなの？じゃあ、中心発問は？まずは内容項目をしっかりと読むということ。いろんな手立てはありますが、これも一つです。

ある学校では、職員室の隅っこに哲学辞典と倫理学辞典を置いていて、内容項目に関するところをコピーして学年に配る。そんなこと、ずっとはしません。数回だけでもいいんです。意識するということ。ほんの入口の意識を、どう一人ひとりの先生の心に火をつけるか、スイッチを入れるか。その手立てさえ数回すれば、あと自らは分で知りたい、もっと知りたい、調べたいになっていきます。そういったことが、やはり推進教師の先生方、校内で道德教育をリードしていく方に、いろんな工夫というかアイデアというか、そういったことが求められているのかもわかりません。

では、今日、向東中学校の中心となっていた「対話的な学び」ということで、実はこれもですね、今日の提案の中にもいろいろありました。あとで時間があれば少し触れさせていただきます。その中

で私が言いたいことは、学校として共通理解する部分と、今日、研究主任の池田先生からもいろいろ説明がありましたが、こういったことを共有すること、と、もう一つ、実は任せられる部分、クラスで違って良い部分というのがあるはずです。当然学年によっても。そこを明確にしながら、グループでの対話だとか、全体での対話だとか、ペアでの対話、これもレジメに5つの視点でちょっと整理させていただきました。

レジメの5ページをご覧ください。

当然いろんな学習形態があります。学習形態によっての工夫ということも対話につながっていきませんが、この5つの中でいかがでしょうか。これもちょっとチェックしていただきたい。自分の授業でなくても結構です。自分の学校の同じ学年団の先生方、こういったことをより強く意識しているな、あーこういったこと何か言ってたな、よく意識している、二重丸。いや、時々こういったことを道德の授業で深い学びにつなげるために、こんなことを大事にしよう、時々言っている、丸。三角、バツ。まず、チェックしていただけますか？

1番、「友達や他者と話し合い、自分とは違う考えを知ることの意義や面白さの実感」。生徒が実感できるような様々な手立てや工夫や声かけ、色々いかがでしょうか。2つ目、「聴くことの大切さ、聴いている反応」。3つ目、「道徳科におけるクリティカルシンキング」。私はどちらかというクエスチョンと言います。クエスチョンを持つ、描くということですね。4つ目、「ホワイトボード等の活用」。自分の学級なりにアレンジしていく。5つ目、「生徒と生徒をつなげる」ということです。

じゃあ、少しだけ見てみましょうか。

①のところ。対話した後に、自分の心や頭の中に何が付け加わったのかな？あれ？今までなかったもので何が入ってきたのかな？何かクエスチョンが起こっていないか、自分で問いかけて自分で気づいていこうということを、どう生徒に働きかけていくか。そういったことを通して、自分の考えがより明確になったり、より自信を持てるようになっていたりしていることに、生徒自身が気づくよ

うな場や生徒自身が気づくような声かけ、手立て、賞賛も含めて、そういった時間を確保しているか、意識しているということです。

で、2つ目のところに関係しますが、「受容し聴く姿勢」ということで3つ書いています。時々ですね、これは向東中ではないんですけど、ワークシートに書いて、そのワークシートを読んで終わり。次の人が読んで終わり、読んで終わり。これがグループの話し合いになっているというふうに書かれているんですけど、それ本当に話し合っていますか？と素朴に。

まずは相手を見る。そしてお互い、可能であれば、ワークシートを単に読むんじゃなく、必要があれば見てもいいですけど、できるだけ自分の言葉で語ろう、伝えようとする。そして反応する、応ずるということです。例えばこれ(写真)、中学生です。本当に顔を上げていて。ここにありますが、書いているもの。しかし、こういう姿。今日も1年生が堂々と、お互いに立場は違っても普通に対話しています。参観者の方が言われていました。まさに対話が対立にならないように、日々の学級経営が出てくる。

対立じゃないんですよ。ディベートじゃないんですよ。ディスカッション、ある意味積み重ねていく。今日のようなオープンエンドのところですよ。

そして3つ目は「クリティカルシンキング(批判的思考)」。本当は批判ではなくて正確に聞き取るとか、正確にという意味がより強いんですよ。私もよく、「え？本当にそうなのかな？本当にそれが大切だろうか？本当にそれだけなの？それ以外にも、もし...」という風に、友達の意見を受け入れながらちょっと頭の中にクエスチョンを描いてみるということします。

他者の意見や考えを共感的に受け止めることは大切です。当然、受け止める、聴いている際の耳に入る聴覚的言語情報、またワークシートを交換して読む、そういった視覚的な言語情報を受容して、道徳的な理解の際に自分のフィルター、私のももの見方、考え方、その自分のフィルターを通して、うん、納得。納得できない。本当にそうだろうか？と吟味するということです。一度このフ

ィルターのところで止めて、本当にこれ正しい情報か考える。SNSには本当に怪しい情報がたくさんあります。それに触れています。中学生も。鵜呑みにしないためにも、待てよと、本当にそうだろうかかなという姿勢を、これはある意味、全教科の中で先生方が大事にされていると思いますが、そのことはすごく重要だと思っています。

今日もホワイトボードがいろいろ使われていましたが、様々な多様な活用があります。重要なことは、ホワイトボードの中に何を書くのか、何を話し合っここに書けばいいのか。そしてその書いたことが話し合いの起点になるような活用ということもいろいろ工夫があると思います。この学校では、星印をつけているところを中心に発表するようにしています。矢印も生徒がいろいろ工夫しています。ホワイトボードを生徒が自分たちで加工するということです。ワークシートに書いたことをただ写すんじゃなくて、そこから次のステップにどう行くかということが、やはり教師としての手立ての一つです。

最後、「生徒と生徒をつなげる」ということを書いていますが、これは、例えばですね、小学校の事例です。同じ尾道市内の別の小学校の事例ですが、「なるほど、いいね。」一言。「よく見て。」一言。「そうか、すごいね。」一言。「なぜ？」一言何々。この4つを低中高それぞれの言葉にしなから、そこから交流が始まる。これも生徒と生徒をつなぐ一つのきっかけになります。

様々なつながりがありますが、レジメに書かせていただいているところ、ちょっと読ませていただきます。ここでは机間指導と意図的指名ということで書かせていただきました。「机間指導で何を見るのか、その後の話し合いでどのように生かそうと意図しているのか」「子どもと子どもをつなぐためにも、机間指導での情報を生かしてほしい」「生徒の発言に対する周囲の反応や表情などへの注視」。そして「教師の立ち位置」。「子どもの発言をよく聞き、全体に返す問い返しでつなげ、みんなで考える機会とする」。今日、3年生の授業でもいろんな問い返し、揺さぶりがありました。かなり先生から意図的にいろいろ。子どもたち同士

をつなぐために、時に教師が介入しながら問い返したり、そしてその問い返しが生徒同士の中で繰り返行われているような場面も今日見られました。ぜひこういったことを大事にさせていただきたいなと思っています。こういったことを道徳以外の各教科の中でも大事にさせていただきたい。そういったことを向東中でも大切にされてきたと思います。

特に②のところに関わってですが、よく言うのは、質の高い対話を目指すためにも、私は聴き手をいかに育てるかだと思っています。つまり、良い話し手は良い聴き手が育てる。良い聴き手が良い話し手を育てる。つまりそれは心理的安全性にもなります。何を言ってもこのクラスなら大丈夫、受け入れてくれる。今日、1年生、立場が違って、ある意味堂々と、そしてじっくりと考えながら言う生徒さんがいました。楽しく考えていました。あの表情。道徳って楽しいよねって。何を言っても大丈夫なんだよねということをすごく感じます。すごく重要なことです。

この「つなぐ」ということで、冊子の51ページをお開きください。すごく参考になるなと思って。広島県の安芸高田市の「聞く－つなぐ－戻す」ということで、51ページの下ですね。「聞く－つなぐ－戻す」。「生徒が言おうとしていることを聞く。生徒の考えをつなぐ。適切なタイミングで教材に戻す」ということで、この「聞く、戻す」の間の「つなぐ」ということ。当然、様々な手立て、工夫がこの「つなぐ」にあるんだと思います。ここではICTの活用でそれを活性化したり、チーム担任制ということがそのつなぐ際の様々な情報の収集にも役立っているのだろうと思っています。大変参考になる取組ではないかなと思っています。

レジメの6ページをお開きください。対話を深めるために、道徳以外の全教科においていろいろと向東中学校で取り組まれています。教育学者のボルノーはこんなことを言っています。人間とは問う存在である。自分の問いに答えることによって、自分の世界を広げる。他の者に耳を傾ける。

他の者の言い分に対して心を開く覚悟。固定的な見解が、ある意味、自己中心的な、自分はこうだという固定的な見解が少しずつ少しずつ解けていく。解体していく。人間は自ら是正し、学び直し、こうしてより深い洞察に。つまり最後は友達との対話、他者との対話が自分の自己内対話につながって、よりこの世界に続くと思いますが、それは別に授業の時間だけではないと思っています。

もしかすると家に帰ってからかもわかりません。もしかしたら授業を終わって一人になった時かもわかりません。そういった対話を深めるための全教科において、ぜひ生徒同士の問い返しとこのことを目指していただきたいということで、レジメの方には「②問い返しをする」ということで、今日、さまざまな問い返しの手立てを見せていただきました。その、教師の問い返し、当然ですが加えて目指すところはきっと生徒同士の問い返し。そのためにも、全ての教科において聴く、反応する、聞きたいということはしっかり受け止めて聴くということがベースになれば、なかなかクエスチョン起こりにくいです。

ぜひ理想的な対話の姿を、生徒の姿で、学年団または学校等で共有しながら進めていただきたいと思っています。問い返しについては、先ほどの柴原元調査官はよく問い返しセブンということで、確認、根拠や理由を深める、言い換え、具体化など、今日、生徒が書いていた枠でも、「例えば」と理由を説明していました。「例えば」とか、まさにそういうことですよ。そういったところを教師が問い返して引き出すというような、「例えば」どうということ？対比、批判・反例、条件変更「もし」。そういった教師からの重層的な問い返しが目指すところは、生徒自身、生徒相互による自己内対応や問い返しにつながっていく、というところですよ。

よく一般的にある問い返す視点として、例えば生徒が考えた背景を問い返す。これまでの経験とのつながりを問い返す。また、話した考えを整理できるか問い返す。ある意味、具体から抽象へですね。そして比較を促し、問い返す。こういったこともあります。実際、よく見られる場合ということで、ここは4つに分けてみましたが、ねらいとな

る、中心となる価値、それをより深く追求しよう。先ほどの柴原先生の1や2にも関係しますが、「もし何々なければ」とか、条件変更で考えさせる。教材というのはある条件の中で設定されていますので、それを少し変更する。また、価値内容の比較対立、そういったことを検討させながら、より深く追求する。そして描かれていない、例えば今日の1年生の、「もし、何をしたらこの村の将来、10年後、20年後どうだろう」という、その先の未来を想定したような問い返しというのも考えられます。そういったことは方法的な側面、内容的な側面がありますが、ぜひいろんな教科の中で、道徳科から各教科へ、そして各教科から道徳科へ生かせるものが多々あると思います。

方法的な側面、様々な学び方の中にも、社会的、道徳的、倫理的な問題について考えを深めようとする際、内容に関わるようなものが多々あります例えば、高等学校の公共、レジメの6ページの下ところに書いていますが、1年生の今日扱ったような教材、自然愛護の側面に、もう少し経済的な側面だとか、いろんなものが入ってきてですね、環境エネルギーの問題の中で原子力発電所のことに賛否を問うような、そういったことをまさにオープンエンドで、賛成反対、どちらでもいいんだけど、どうしてそう考えるのかということをしっかり見つめていくようなこともあります。

例えば、レジメに「目的論」と「義務論」と書いていますが、「温暖化に伴う地球環境問題は世界における共通の課題として開発と環境保全の問題」というのが高等学校の公共の中で、ちょうどNHKのEテレなんかでもよく紹介されたりしています。

「目的論」というのは、ある意味、功利主義、最大多数の最大幸福、決断する方法としては多数決。「治水、道路、空港など開発は安全で快適な生活を実現しているから、自然環境が損なわれるマイナスがあったとしても、日々の生活、それを幸せに幸福にするから正しい選択といえる。持続可能性にできる限り配慮すれば、開発は正当できるんじゃないか」という立場。

それに対して「義務論」、ある意味、カント哲学の

ような立場ですね。「過去に人間の開発で絶滅した生物も多くある。生態系の保護は人間の義務。自然の多様性や生態系の維持を損なう開発は正しい選択じゃない。人間もその一員なんだ。生態系の一部を、人間自身が自分たちの都合で破壊するような開発は正しくない、行うべきではない」というような立場。

様々な考えがありますが、そういった答えが一つではない、答えがわからないようなものについて、オープンな議論をしていくということですね。

そういったことが今、教科書の中にも少しずつ増えてきています。少しずつ少しずつ。中学校の方は特に現実社会の問題を取り上げたオープンエンドの教材が増えてつつあります。

レジメの7ページの方ですが、これは授業を振り返る際にぜひ大切に生かしてほしい視点として紹介しますが、解説の中には「評価の視点」と「評価の観点」ということで一応分けられて書かれています。7ページに書いているのは子どもたちの学習状況を見る「評価の視点」ですが、その二重丸のところに書いています「解説の『評価の視点』の文末等を読み替えて『評価の観点』としても捉えられる」んだということで、考えられる学習指導となっているかとか、そういったことで様々なところに取り入れられますよということです。こういったことをぜひ参考にさせていただきたいということです。

今日せっかくですから、授業者の先生、今授業されてもう3時間、3時間半経ったと思いますが、1年生の子川先生から、もう一度同じ教材で授業するとすれば、ここをこうしたいというのを一点だけ、いろいろある中で一点だけ自分で今表現していただきたいんですが、子川先生おられますか？構いませんか？一点だけです。欲張らずに。いろいろ分科会でもご意見があったと思います。で、もう一回するとしたら、ここをこうしたいというのを一点のみ教えてください。すいません、突然。簡単で結構ですので。はい、どうぞ。

【子川】

今日はみなさんありがとうございました。

一点だけ、もう一回するとしたら、分科会の話でもあったんですけども、子供の視点に立つてというところを、私自身がもう一回、授業を作る中で練っていきたいと思います。具体的に言うと、1年生の状態が自然が、ということだったんですけども、生徒が自然を守る理由として「自分たちの遊び場だから」という考えが出てきたときに、生徒の経験を問い返せなかったのが、そこを問い返したり、子供にとっては何かという子供の立場を考えていなかったなと思ったので直したいです。

ありがとうございました。2年の村上先生、一言、その場で結構ですので、はい、お願いします。3年槇野先生、その後お願いします。

【村上】

失礼します。村上でございます。

一つだけ改善といいますか、是非とももう一度するとすればやってみたいということなんですけど、日常生活で実際に起こった、自分たちが本当に経験したことをもとにして、自主自律を加えながら責任ある行動とは何であろうか、ということを取り入れてみたいというふうに思います。

ありがとうございました。槇野先生、お願いいたします。

【槇野】

3年生の教諭でございます。ありがとうございました。

今日の授業を振り返ってもう一度するとすれば、分科会でご指摘をいただいたんですけども、アンケートで分析した自分のクラスの実態と自分の授業の構成のところ、少しずれがあったかなという反省があったので、もう少しクラスの状況を見ながら、今回は、三者にこう言う、三者から、と考えられるように広く聞いたんですけど、自分も悩んだりしたんですけど、もう少し一つの視点を絞りながらそこから考えるというのも一つ、代案で

いただいたので、もしあれば教えてほしいなというふうに思いました。

ありがとうございました。

授業をされて、誰かに見ていただいたら、いろいろご意見いただく、すごく重要なことです。日々の中で誰も見ていないとき、自分自身で振り返って自分の授業をモニタリングするということです。7ページの下に書いてある「自分で自分をモニタリングする、授業を振り返る。」その視点をぜひ参考にさせていただきたいということです。

あまり欲張らずに、自分の授業一つだけでいいです。時に必要があれば録音とか録画。この頃いろんなICT機能もあります。タブレットを置いておくだけでも結構です。ぜひ自分で。普段、1年間ほとんど誰にも見られないと思います。自分です、最後振り返るのは、自分の授業を変えるのは自分です。

一つでいいです。欲張らずにその一つを確実にしていくことです。その代わり、それを積み上げてください。確実に他の歯車が回ってきます。だから焦らずに続けていただきたい。それを7ページの下に書いています。

最後8ページのところですが、今日まさにそれぞれの授業、子どもたちの対話、そして安心して発言できる学級作り、学びの一つのクラス集団づくりが基盤にあったと思います。

そういった中で、先生方の学校、それぞれ大事にされていることが多々あると思います。

その中で3つだけちょっと言います。

一つは「静の10秒」。書くことが苦手な生徒さんもおられると思います。今日、黒板に1時間の学びがたくさん書いてありました。ああいったことを静かに眺めるだけでもいいんです。そして人と違った書き方でも大丈夫なんだ。このクラス大丈夫だと。たくさん書くことがいいことではありません。当然たくさん書ければ書くでいいんですが、重要なことは深く自分で自己を見つめて考えるということです。

そして2つ目、そのための「心理的安全性」。先

ほど言いました。わからないことはわからないで、どうしてそう思うの？教えてよ、って自然に言える。自分に自信がなくても、言っても大丈夫と感じる雰囲気がこのクラスにはある。子供たちが学校で一番楽しいこと。これNHKのアンケートですが、ダントツで友達と話したり、一緒に何かをしたりすること。やはり子どもたちにとって学校での友達との関係というのは何より。このクラスでの居心地、そういったことに繋がります。ぜひですね、この心理的安全性を高めるために、先生方がもう普通にされていることだと思いますが、それを共通理解して、やっぱりこういったことが基盤だよねと、集団作りの再確認をしていただきたいということです。

最後、「子どもの視点に立つ」という当たり前のことです。鱒坂先生の言葉は古いかも知れませんが、私は時代が変わっても変わらないと思っています。「教育の道というのは、目の前にいる子どもの存在とともに始まる」。また、奈須先生は「今回の学習指導要領改訂は徹頭徹尾『学習する子どもの視点に立つ』ことを原理として進められた。」と語られています。元調査官の七條先生は、「教育という様々な作用、営みの中で肝要なことは『子ども理解』。まず目の前の子供をしっかりと見つめる。」そこからスタートだよね、ということです。当たり前のことかも知れませんが、やはりどんなに変わっていても、ここの原点というのは大事なのではないかと考えています。

様々な授業の工夫や手立てがあると思います。できることからでいいと思います。中等教育資料の中にも、時間がない中でどう研修を進めるかというのを書いております。(会場の)後ろのところに、研修シートということで、15分でも30分でも様々な研修ができますよ、というのを少し紹介させていただき、いくらか置いてありますので、ご自由に、もし校内で活用してみようと思えば、お取りいただいたらと思います。

ぜひですね、道徳科の授業、そして道徳教育、そして人間としての倫理観、そういったことをこれからも大事にさせていただきたいと考えております。

斎藤喜博さんの「教育というのは、最後は人と人との人間としての関わり、その働き」なんだ。つまり、教師の人間性というのは子どもたちに伝わるよねということです。

アンパンマンのやなせたかしさんが言うように、喉までありがとうと出ているのにそれがなかなか言えない。それが人間、ある意味人間理解なんだということです。

今日、2年生の分科会でも津森指導主事様のお話がありました。まさに人間理解を大事にしていくな。「すごくわかっているけどできない」。それが自分の中にもあるかもしれない。

先生方が携わられている「教育」というのは本当に素晴らしい仕事だと思っています。大変な仕事ですが。でも子どもたちの一生の基盤になっていくのが、1時間1時間の道徳の時間、そして道徳教育なんだという誇りを持ってですね、これからも取り組んでいただきたいと思います。

向東中学校の先生方、また、ここ広島県の道徳部会の片山会長様はじめ、関係者の皆様、そして、今日授業を見せてくださった生徒の皆さんに感謝を申し上げて終わりたいと思います。

本当にありがとうございました。